

## 「現地を訪問して想うこと」

2010年 法学部卒 福本 光代

「え、そんなに復興してないの？」岩手県の被災地を見てきた私の話を聞き、周囲の人々は異口同音に言った。関西から東北は遠い。そして、今や新聞に大きく載る震災関連の記事といえば、大方が福島第一原発に関するものだ。もう震災から2年8ヶ月経っているし、街自体はそこそこ復興しているだろう…実際に被災地に立つまで、私自身そう思っていた。

陸前高田市の駅、というか、「駅のあった場所」で、震災ガイドさんは震災前の写真を掲げながら、どこか懐かしそうに言った。「ここに駅がありました。駅前のメインストリートの両側には、色々なお店がありました。和菓子屋さん、乾物屋さん、歯医者さん…」。私は絶句した。駅前のモニュメントのような岩と、「メインストリート」なる道路の他に、何もない。道路の両側には、ただ草が生い茂っているだけだ。街がまるごと無くなったままだった。

その後訪れた場所でも「ここには多くの住宅がありました」。しかし、「駅のあった場所」と同じく、今あるのは一面に生い茂る草だけだ。こんなに閑散とした場所が、人々が行き交う賑やかな場所だったなんて、俄かには信じられない。

今回の被災を教訓にして、頑丈な防波堤を造る案がある、と震災ガイドさんは言った。その防波堤について質問した私に、「でも、何より住宅です。まだ大勢の人達が、夏は暑く冬は寒い、そしてプライバシーのない仮設住宅に住んでいるから…」。震災から2年8ヶ月が経った今でも、こんな状態なのだ。東京五輪が決まった後、「余計に東北は忘れ去られてしまうのでは」という被災者の方の声をメディアが報道していたが、その意味が分かった気がした。

その夜の交流会。岩手県校友で釜石市職員の方がいらっしゃった。今も大変なご苦勞をされているその先輩に、私は思い切って素直な質問をぶつけてみた。「私は今20代で、大きな寄付ができるような余裕もないし、自分のことで精一杯です。このような私にできる一番良い支援って何でしょう」。その先輩は少し考えて、こう仰った。「東北に、被災地に想いを寄せ続けること、ではないでしょうか」。これを聞いて、心が軽くなった。そして、思った。「私は、私の日常を一生懸命生きよう、東北に想いを寄せ続けながら」。

「想いを寄せ続ける」、そのカタチは十人十色だろう。ボランティアや寄付に限らず、被災地を知ろうとすることや、観光に出掛けてみることも「想いを寄せ続ける」カタチの一つだと思う。

これからも、あわただしい日常は続くだろう。カタチは変わっても、その時、その時、等身大の自分で東北に想いを寄せ続けていきたい。